

# 自閉症児の音声模倣促進に及ぼす逆模倣の効果

The contingent imitation facilitates spontaneous vocal imitation in a child with autism spectrum disorders

○石塚祐香<sup>1</sup>・近藤鮎子<sup>1,2</sup>・山本淳<sup>1,3</sup>

<sup>1</sup>慶應義塾大学大学院社会学研究科/<sup>2</sup>日本学術振興会・<sup>3</sup>慶應義塾大学文学部

○Yuka Ishizuka・Ayuko Kondo・Jun-ichi Yamamoto

<sup>1</sup>Keio University, Graduate school of Human Relations/<sup>2</sup>Japan Society for the Promotion of Science・<sup>3</sup>Keio University

keywords: contingent imitation, vocal imitation, mutual imitation

## 問題と目的

自閉症児は他の発達障害や、定型発達児と比較して、模倣することに困難を持つことが多い。Escalona et al., (2002) は、参加児が発した行動を実験者が模倣する条件と、模倣しない条件において、自閉症児の行動を比較した。その結果、参加児の行動を逆模倣する条件の方が、大人への接触などの社会的行動の生起数の増加を示した。このように、子供が発した行動を大人が模倣することを、逆模倣という。自閉症児は、逆模倣をすることで、社会的行動を獲得することが明らかとなっている。しかし、それらの研究は、自閉症児の行動全般を対象としたものが多く、音声に特化した研究は少ないといえる。

したがって、本実験では、条件交替デザインを用いて、逆模倣条件と逆模倣をしない随伴的反応条件を比較し、参加児の音声反応に変化がみられるかどうかを比較、検討することを目的とした。

## 方法

### 参加児:

本研究には、3歳0ヶ月の自閉症スペクトラム障害のある男児1名が参加した。

### 実験デザイン:

条件交替デザインを用いた。4セッションを1ブロックとし、合計4ブロック実施した。1セッションは2分間であった。1ブロックにおける各セッションの順番は、随伴的反応条件(R条件)と、逆模倣条件(I条件)を交互に実施した。順番はブロックごとにカウンターバランスをとった。

### 手続き:

実験は机上場面で実施した。実験者が参加児に絵カードを提示し、命名反応を促した。

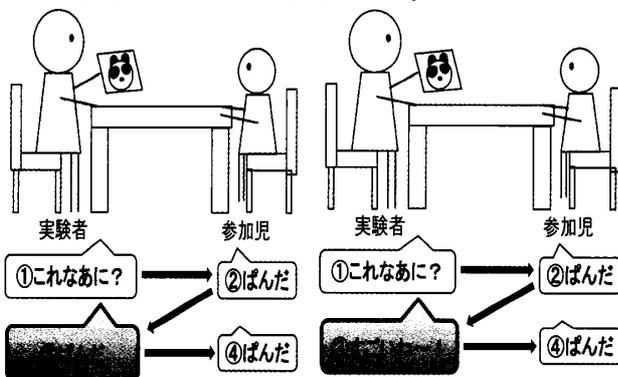


図1.逆模倣条件

図2.随伴的反応条件

(1)逆模倣条件(図1参照):実験者が参加児の音声反応を即時に逆模倣した。

(2)随伴的反応条件(図2参照):実験者は参加児の音声反応を模倣はしないが、音声で即時に反応した。

### 従属変数:

参加児の音声模倣数、実験者と参加児の音声の交互交代数、参加児の発話数

## 結果と考察

A児の音声模倣の累積生起インターバル数の推移を図3に示した。図3より、逆模倣条件の方が、随伴的反応条件と比較して、音声模倣の累積インターバル数が多かった。また、音声の交互交代の累積インターバル数においても、同様の結果が得られた。しかしA児の発話の累積インターバル数については、両条件では大きな差は見られなかった。

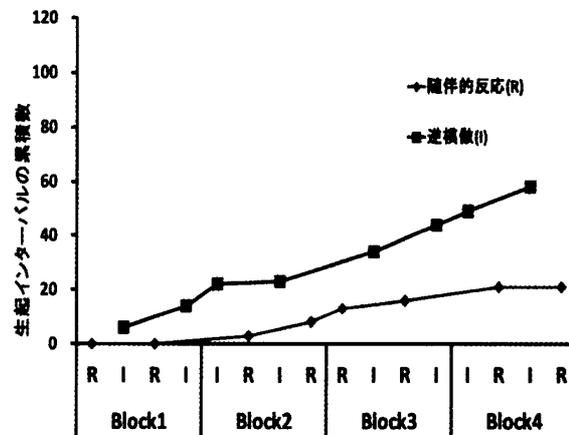


図3. 音声模倣における生起インターバルの累積数

本研究から随伴的反応条件と比較して、逆模倣条件の方が、音声模倣の累積数が多くなった。これらの結果から、参加児の発話の中でも特に自発的な音声模倣を促すことを示した。また、音声の交互交代の累積数においても、逆模倣条件で多かったことから、相互模倣が成立したと言える。この結果は、逆模倣は自然な相互模倣を促すための、重要な支援技法となり得ることを示唆した。

## 引用文献

Escalona, A., Field, T., Nadel, J., & Lundy, B. (2002). Brief report imitation effects on children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 32, 141-144.